

隨泉寺寺報

平成20年(2008年)3月号 第451号

082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

春季彼岸会法座

講師 専教寺住職 中野 道演師

講題 『信心のお念仏』

『うれしくば なむあみだぶつを とのうべし

うれしくなくば なおとのうべし この善太郎』「善太郎」

善太郎さんの生活のよりどころは、すべてナムアミダブツであったことがわかります。うれしいときは阿弥陀如来さまのお力を感じておられるとき。

うれしくないときは如来さまを忘れて苦海の中。その自分こそ目当てと名のり出てくださるナムアミダブツであったと味わっておられました。

お念仏は呪文ではありません。また救われる条件でもありません。お礼を申す言葉です。ありがとうございますと佛恩報謝のことばです。私の口から出る言葉ですが、私の中に入っていないと出ません。私の口をついて仏様が声となって現れてくださるのです。

悲しいとき、苦しいとき、また嬉しい時、楽しいときにも、私とともにあって名乗り出てくださるのです。

3月の法座予定

- 3月 9日.....掃除 高部
- 3月 14日昼席午後1時より.....春季彼岸会法座
- 3月 14日夜席午後7時より.....出張法座 高部 中元(燈明田本家)氏宅
- 3月 15日朝席午前10時より.....春季彼岸会法座 おとき
- 3月 15日昼席午後1時より.....春季彼岸会法座
- 3月 15日昼席終了後より.....佛婦役員会
- 4月 2日午後4時より.....門信徒会本部役員会 花見

ご挨拶 隨泉寺老院 鎌田不動

昨年12月報恩講法座の席でご挨拶を致し、寺報1月号で今年の聖語をお示し致しましたが、病気が進行して入院加療致し、目下自宅療養中です。み仏のみ教えの中、お念仏にささえられ今日まで門信徒の皆様のお育てを頂き、共に歩む人生、この世に生を得て共どもに浄土往生のお念佛の道を歩み、いつの日か必ず浄土でお会いできる日を確信して、精一杯生き抜きたい思いで、養病生活に専念に致します。門信徒の皆様のご健康を念じ、ご挨拶と致します。(平成20年2月29日記) 合掌

南無阿弥陀仏

☆4月18日～5月25日、広島県立美術館で「本願寺展」

国宝「三十六人家集」など150点展示

大遠忌記念として、4月18日から5月25日まで、広島県立美術館(広島市中区上幟町2-22)で「本願寺展」が開かれる。主催は同美術館と本願寺派、朝日新聞社、中国新聞社。文化庁などが後援し、龍谷大学が特別協力。同展には、国宝「安城御影(あんじょうのごえい)(副本)」や歴代宗主の肖像、絵巻物、『教行信証』などの典籍類、国宝「三十六人家集」に代表される雅(みやび)やかな古筆、書院等の壮麗な障壁画など、本願寺所蔵の法宝物を中心に国宝5件、重要文化財27件を含む150点が展示される。会期中、五期にわたり展示替えを予定(巻替え、頁替えなどを含む)。



入場料は一般1200円、高・大学生900円、小・中学生700円(団体・前売など割引あり)。月曜日休館(5月5日は除く)。

関連行事として、4月27日午後1時から、同美術館地下講堂で開催記念講演会。岡村喜史・龍谷大学准教授が「本願寺の歴史と美術」と題し講演する。定員は200人。無料(申し込み不要)。

御礼

永代経懇志 金 参拾萬円 植木岩夫殿 故 植木サツ工様 特別永代経志として

御礼

門信徒会へ 金 一封 植木岩夫殿 故 植木サツ工様 香典返しとして

御礼

仏教婦人会へ 金 一封 植木岩夫殿 故 植木サツ工様 香典返しとして

仏さまはいつも 私たちの心の中に

「泣」という字は、「サンズイ」に「立」という字が添えてあります。「涙」という字は、「サンズイ」に「戻」という字が添えてあります。これは、私たちが深い悲しみに出会い、涙に溺れてしまいそうになっているとき、それがどんなに深い悲しみであっても、必ず「立」ち上がらせずにはおかないという、仏さまの願いを表わすために「サンズイ」に「立」を添えて「泣」という字にし、「涙」におし流されてしまおうとする私たちを、必ず、引き「戻」してくださる仏さまのお心を表わすために「サンズイ」に「戻」を添えて、「涙」という字にしてあるのだと聞いたことがあります。これに関連して思い出すのは、「観無量寿経の中の「諸仏如来 是法界身 入一切衆生 心想中（諸仏如来は是れ法界の身なり。一切衆生の心想の中に入り給う）」というおことばです。如来さまは、いつも、私たちの心や想いの中におはいらくださって、私たちをお導きくださっているのです。私たちが、悲しみの底に溺れて泣いているときには、新しい視点をお与えになって、立ち上がらせ、悲しみの涙におし流されてしまおうとしているときには、新しい生きがいをお示しくださって、引き戻してくださるのでしょう。



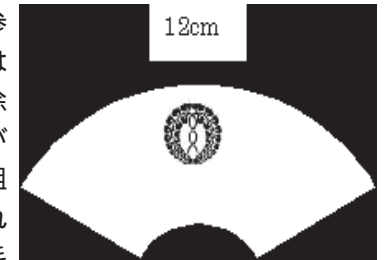
門徒式章をつけましょう。

お寺に参るときはお念珠と聖典、それと門徒式章を持参します。昔は御前帽子に肩衣という姿だったと聞きます。御前帽子というのは今で言う花嫁さんの角隠しでしょう。肩衣というのはさしずめ袂でしょうか。農作業等でなかなか晴れ着を着れませんが、せめて仏様の前に出るときには、みだしを整えてということでしょう。

さて、わざわざこの話をするのは、お葬式の時のことです。お通夜や葬儀の時にぜひとも、門徒式章をつけていただきたいのです。この頃、葬儀会館でお葬式をされる方が多くなってきました。このときは皆さん黒い礼装をしておられ、お数珠は皆さん持っておられますが、式章をかけておられる人が非常に少ないのです。熊野のお葬式にお参りしたときに、熊野ではほとんどの人が式章をつけておられました。とても皆さんの様子が整然としていて、美しかった気がします。皆さんもお葬式やお通夜、また法事にお参りになるとき、必ずお数珠と聖典、それに門徒式章を身につけましょう。

【御前帽子】(御礼帽子)(おまえぼうし)

江戸時代後期、門徒の人が寺院に参詣する為には、最高の礼装をつけなければならなかったのです。時あたかも婦人の礼装が被衣(かずき)から綿帽子へと変わり、さらに**揚げ帽子**(あげぼうし)へと移る頃、下り藤の紋をつけた扇面形の小さな白裂を前髪につけて、寺院に参詣する門徒のご婦人達の姿がありました。揚げ帽子は御殿女中や上流階級の女性が外出の際に防寒具や塵除けとして使われていました。元禄時代になると役者が被ったことから流行となり、花嫁衣装の角かくしの祖型ともなりました。長い髪の毛には霊力が宿るとされていた為、災いを持ち込まないという意味や、髪の毛の不浄を隠すためと考えれば、御礼帽子と花嫁の角かくしには共通点が見られます。



【肩衣】(かたぎぬ)



「肩衣」は、門徒が仏前に入る際、最上の敬意を表すのに着用してきたものです。江戸時代から使用されてきたようで、報恩講や大切な法要に着用されています。

りやくかたぎぬは、真宗大谷派の門徒が仏前にて首から下げて着用する**法具**。宗紋の抱牡丹紋などが刺繍してある。外観は置袈裟に似る。仏前に於ける礼装。以前は**肩衣**であったが、大きく持ち運びに不便な為、簡略化され認められた物。

【門徒式章】(もんとしきしょう)

「門徒式章」が使われはじめたのは、昭和時代に入ってからのもので、それ以前に用いられていた「肩衣」(袂の上だけのようなものと聞いています。見たことはありません)に

代えて本山が制定されました。

京都の井筒法衣店の前社長、井筒雅風氏による「法衣袈裟史」によると以下のような記述があります。

『昭和になってから東本願寺においては、前門主の財政的乱脈建て直しのために相続講を作り、門信徒に寄付を勧奨して新たに門信徒用の呪字袈裟(天台宗の袈裟)を定めて同朋袈裟と呼び、また西本願寺においても門徒用に同様のひも付きの袈裟を定め、式章と称して肩衣に替えて用いました。』

とあります。式章のルーツは天台宗や真言宗の呪字(種子)袈裟のようです。式章は、僧侶が法要儀式を勤めるため仏様の前に出るとき、法衣、袈裟で正装すると同様、門信徒の皆様が仏様の前に出るときの正装にもちいます。それは、浄土真宗の門信徒であると言う自覚とその現れです。